利根川
取手市を流れる利根川は、流域面積日本一の一級河川で、地域の生活・文化の要となっている。写真左が取手市。

地方のかがやき

取手市［茨城県］

「ほどよく絶妙」アートにも力を入れるまち

茨城県の南部に位置し、利根川をはさんで千葉県と接するまち。江戸時代には水戸街道の宿場町、利根川舟運の要衝として栄え、昭和40年代以降は首都圏のベッドタウンとして発展しました。地名は、戦国時代に大鹿太郎左衛門の砦があったという説や、平将門の砦に由来するという説があります。

たいけん美じゅつ場 VIVA

取手駅直結の駅ビル「アトレ」にある文化交流体験施設。アートを通じたコミュニティづくりを目指し、展示や体験イベントを行う。

撮影：加藤 甫

Toride－City

人口：105, 787 人（令和 8 年 3 月 1 日現在）
面積：69. 94 ㎢
URL：https://www.city.toride.ibaraki.jp/

戸頭団地の壁アート

アーティストの上原耕生さんが戸頭団地の壁に描いた立体作品群。平成28年8月、11棟15面のアート作品として完成した。

取手緑地運動公園

利根川の河川敷に広がる公園。野球場やサッカー場、テニスコートなどのスポーツ施設とバーベキュー広場がある。

長禅寺三世堂

承平元年（931年）に平将門が創建したと伝わる古刹。内部は通常非公開で、毎年 4 月18日に特別公開される。茨城県指定文化財。

旧取手宿本陣染野家住宅

江戸時代、水戸街道を往来する大名が宿泊に利用した本陣。入母屋破風の屋根や、書院付きの上段の間など、見どころが多い。

首都圏に近接する取手市。JR 常磐線の始発駅でもある取手駅からは、東京駅まで乗り換えなしで約40分、品川駅まで約45分と、通勤・通学に便利なほか、成田空港へも約70分と良好なアクセスを誇ります。南部・西部は利根川に沿って丘陵地帯が続き、小貝川沿いには水田地帯が広がるなど、自然豊かな環境も特長です。河川敷には広大な公園が整備され、サイクリングや野球、サッカー、ゴルフなど多彩なスポーツに親しめます。地価や物価も比較的安く、ゆとりある住環境の中で、落ち着いた暮らしを実現できるまちです。

東京藝術大学のキャンパスを有する取手は、「アートのまち」でもあります。市内各所に、学生や郷土作家による作品が点在。市役所などで配布する「取手アートマップ」を手に、市内を巡りながらアートを身近に感じることができます。

岡堰

寛永7年（1630年）に関東郡代伊奈忠治によって築造され、取手市一帯の用水源として利用されてきた。現在の堰は平成 8 年11 月に竣工。

桜めぐり

道路沿いに桜が咲き誇る「常総ふれあい道路」や、ライトアップも美しい「さくら荘」「かたらいの郷」など、桜の名所が多数。

キリンビール 取手工場

キリンビールの国内最大級の製造拠点。麦汁の飲み比べや、できたてのビール試飲を体験できる工場見学ツアー（要予約・20歳以上有料）が人気。

とりで利根川大花火

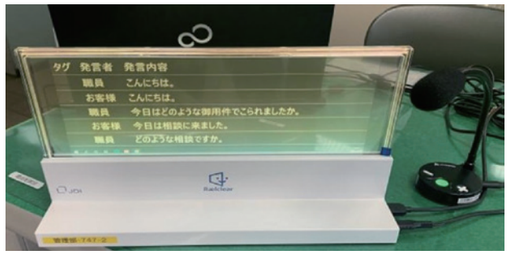
昭和 5 年、大利根橋開通を記念して始まった取手の夏の風物詩。毎年約12万人が訪れ、利根川の夜空を彩る大輪の花火やドローンショーが楽しめる。

窓口での意思疎通をバリアフリー化

音声認識文字表示ディスプレイ

相談者側のマイクは、周囲の音を拾いにくい単指向型を採用。職員側は広指向型で、他部署への電話確認時の会話内容も表示される。

障害福祉課では、これまで手話通訳者が不在となる日に筆談で対応していましたが、意思疎通のしづらさが課題でした。そこで令和５年、会話内容をリアルタイムで文字化し、透明なディスプレイ上に表示するシステムを導入。ネットに接続しないスタンドアロン環境で運用することで、相談内容が外部に漏れず、相談者のプライバシーが守られています。これにより、相談者は開庁日であれば曜日を問わず来庁でき、自身の相談内容が正確に伝わる安心感を得られるようになりました。職員も相手の表情を見ながら対応に集中できるなど、窓口サービスの質と心理的安全性の向上につなげています。



周囲の方に相談内容を見られないよう、小型ディスプレイを導入。文字のサイズは PC 側で自由に変更でき、視認性を確保している。

市民と取手市、東京藝術大学の連携で「アートのまち取手」を推進

平成３年の東京藝術大学取手校地開設以来、学生による小中学校への美術・音楽指導や卒業・修了生への市長賞授与など、大学と連携した事業を展開。さらに、アーティストに制作や交流の場を提供するなど、アートを通じた教育とコミュニティの形成に取り組んでいます。

取手市民会館正面に描かれた巨大壁画「調和する街、取手」。制作の様子は動画や写真で公開。

市立全小学校で「対話型鑑賞」を実施。他者を否定せず意見を伝え、思考力や自己肯定感を育む。

移住者にうかがいました！
取手市のいち押し

乗るだけで癒やされるアートな渡し船

羽原康恵さん
（取手アートプロジェクト包括ディレクター）

私のいち押しは、「小堀（おおほり）の渡し」です。100年以上の歴史ある渡し船で、現在の船体は東京藝術大学長の日比野克彦さんがデザイン。アートとしての魅力はもちろん、風に吹かれ、鳥のさえずりを聞きながら過ごす時間が本当に気持ちいいです。市民にとってアートは特別なものではなく、身近にあるもの。アーティストも地域に暮らしながら作品を生み出しています。

日比野氏が、市の鳥カワセミに着想を得てデザイン。水面に映えるカラフルなデザインが特長。

「こどもまんなか社会」の実現へ

取手市こども計画

民間企業との連携により、市で出産した家庭に「出産おめでとうばこ」を無償でプレゼント。

取手市は県内２番目に「こどもまんなか応援サポーター」を宣言。今後はステッカーを活用し、企業や団体に取り組みを広げていく。

ステッカーのデザインは市内在学・在住の中高生を対象に公募し、市内小学校での投票を経て決定した。

令和７年４月に「こども部」を創設し、「取手市こども計画」を始動しました。結婚から妊娠、出産、子育てまで各ライフステージに寄り添い、結婚に伴う新生活費用の補助や無痛分娩費用助成、民間企業と連携した「出産おめでとうばこ」のプレゼントなど、切れ目のない支援を展開。令和８年度からは、子育て経験者が家庭を訪問し、おむつやミルクを届けつつ保護者や赤ちゃんの様子を見守る「見守りおむつ定期便事業」を開始し、精神的・経済的支援も充実させていきます。また、「こどもまんなか」の理念のもと、高校生との対話型ワークショップ「こども未来会議」を開催するなど、若者の声を市政に反映しています。

令和５年度より始まった「こども未来会議」。令和７年度は取手市内にある７つの高校から15名が集まった。

令和７年度は高校生自ら企画・出演し、市のPR動画を作成。YouTube やインスタグラムで展開している。

都会と田舎のバランスがほどよく絶妙

取手市長
中村（なかむら） 修（おさむ）

取手市のキャッチフレーズは「ほどよく絶妙」。都心への利便性、利根川の自然、物価の安さなど、あらゆる面の"絶妙"加減が評価され、令和６年は日本人の転入超過数が茨城県で２位となりました。人口減少や公共施設の老朽化といった全国的な課題にいち早く直面し、対策を続けてきた分、復活のスピードも早く、まちの勢いは着実に上向いています。「とりで利根川大花火」をはじめ、人が集うイベントも盛んで、お米や野菜などの農産物にも恵まれています。今後も"選ばれ続けるまち"をめざし、豊かな自然を生かしながら、駅前の開発や公園の整備などを推進。関係・交流人口の創出と、回遊性の向上に取り組んでいきます。